

## 華嚴宗成立に関する一考察

石 井 秀 法

江南の天台宗が大乘の法華經によつて一代仏教を統攝し、これに対比して、北地仏教を継ぎ、華嚴經を以て一代仏教を統理したものが唐の賢首大師法藏の華嚴宗である。その発端は、東晋の仏陀跋陀羅の華嚴經の訳出と菩提流支の世親十地經論の伝訳、研究に起因している。智儼の華嚴經の講義を聞いた法藏は在俗の身

で華嚴の教理を究め、則天武后の信任をうけ、沙門となつて、武后の建立した太原寺で華嚴經を講じ、彼に賢首大師の名号を授けた。こゝで天台教学、又天台大師智顗について考察する。智顗は南朝仏教の伝統に立つて北朝の仏教を統合した。梁の武帝の大同四年荊州華容に生れ、梁末の乱世に出家して涅槃、法華等の諸大乘經典の研究につとめ、光州大蘇山に慧思の指導をうけ法華三昧を証得し、一宗開創したのである。智顗は、南朝の涅槃經尊重の傾向から進んで、法華經を以

て釈迦一代の教説の真髓と成した。智顗は実践的な法華行者の上に、天台教学を主張し、従来の南朝仏教に對する批判、天台教学が江南の伝統でない事を知る。一宗開創の基調は、法華經に求め、南北仏教を批判し、所謂南三北七の教相判釈を綜合したものが五時八教の天台教判である。釈尊一代四十余年の説法を華嚴時、阿含時、方等時、般若時、法華、涅槃時の五時に分類し、先ず説法の年時より大小二乗の教典を判別したのである。八教判とは、釈尊説法の形式（化儀四教）と内容（化法四教）から分類したものである。衆生教化に用いられた説法の形式、儀式の方面から頓教、漸教、秘密教及び不定教の化儀の四教を立てた。これは江南仏教界の教判を伝承したものであつた。又教義内容から分類した藏教、通教、別教及び円教の化法の四教は、北地仏教の教判を伝承拡充したものであつた。

天台はこの教判によつて、法華經こそ、一切經中の最高權威だと強調したものである。天台の教義に於いては宇宙の現象（事）も空、仮、中三諦は円融不二にして、現象の外に本体なく（事即理）、生滅する森羅万象は、その尽不變常住の本体である（理即事）とするかゝる心性達觀の實踐行法として「摩訶止観」に四種三昧の行政が提示されている。智顗は南朝仏教界から出て、北朝の實踐仏教を修め、兩者の止揚をはかり、教（教理）觀（實踐）双修の新仏教を立てたのである。こゝに天台宗成立の意義が存する。

華嚴の教判は法藏により、彼は釈尊一代の仏教を、その説法の形式と内容の上から五教十宗に判釈して、大乘華嚴經に説く円教の權威を明示した。小乗、始、終、頓教及び円教の五教判は、法についての分類で、華北仏教界の伝統にある華嚴經尊重の教判の補正であつた。その十宗判は、この五教を更に理について拡充し詳説したものである。その十宗の説に法藏の華嚴教學の特色が見られる。

「六十華嚴」が仏陀跋陀羅によつて訳出され、華嚴經訳出は支那の教學界に甚大な影響を与えた。訳場に

居た、法業が「華嚴經旨帰」二巻を書いたのが「華嚴」に関する最初のもので、法業は慧觀の弟子であり、学系的に見ると後の智正、智儼に及ぶ迄の法業又玄高の弟子である玄暢による「華嚴經疏」がある事によつて、或程度の華嚴思想又源流があつたものと思われる。玄高は仏陀跋陀羅の直接の弟子であり、彼の教をうけ最も禅に達した人である。仏陀跋陀羅と玄高の間に「華嚴」の授受があつたと言う文献はない。しかし玄暢の事跡より見ると、何等かの關係があつた事に相違なく思われる。「華嚴經旨帰」は賢首大師の「華嚴伝」には「見行於世」とあり唐代迄は残つていたものと思われる。玄暢の「華嚴經疏」は「華嚴經」全部の註釈書としては最初のものであると思われ、玄暢は律にも關係あつて、南方で菩薩戒法を宣揚し、その作法を説いたものを、天台大師は、これを「暢法師本」と呼んでいる。「十地論」の翻譯が出来て以後「華嚴」の研究は、この系統の学者の手に帰し、特に仏陀扇多には「華嚴經旨帰」二巻の著述があると言うが伝わっていない。その弟子慧光が「華嚴經疏」を著わし、「華嚴」の研究も盛んになり、隋代に終南山の智正、その下

に智儼が出て、華嚴宗成立の動機となつた。

こゝで華嚴宗伝統説には問題がある。それは従来華嚴宗では、支那に於ける第一祖を杜順とし、第二祖智儼、第三祖法蔵とし、即ち法蔵によつて、この宗が大成したのである。

しかしこの説には史実の根拠がない、そこで第一祖智正、第二祖智儼、第三祖法蔵とし、第一祖智正とす可きである、杜順を華嚴宗に係ありとするのが誤りであると思う。第一に杜順が華嚴に係ありと言う文献上の証拠がない、第二に若し「華嚴」に係あるなら杜順の学統は何処から来ているか、探す所がない。

第三に法蔵も杜順を「華嚴」系統の中に加えていない、この事は今日の学界に於ても言われている。「続高僧伝」「華嚴伝」を見ても、智儼が杜順の弟子とあるが「華嚴」を伝えたとはない。結局杜順は伝説の神僧であり、法蔵も「華嚴伝」に神僧杜順とあり、学問に係がない、たゞの神僧にすぎないのである。智儼が「華嚴」を学ぶ動機について

儼以法門繁曠智海冲深 方駕司南未知何厝乃至於經  
藏前礼而自立誓信手取之得華嚴第一、即於当寺智正

#### 法師下 聴受此經

とあり、智儼の「華嚴」を学んだ由来であり、この以前に杜順から承受した事実はない。杜順と「華嚴」と関係のない事を語る証拠である。「続高僧伝」は智儼が杜順の弟子である事を杜順伝に記し、智正伝にもその弟子に智儼ありと言ひ、智儼を智現と書いてゐる。

これは別人でなく同一人である、要するに杜順と智正は同時代の人、智儼と智現も同時代の人で、二人共至相寺で智正の弟子であり、同一の寺で「華嚴」は同一の師より受けたと言う事はあり得ないのである。そこで智儼は杜順よりでなく、智正より「華嚴」を承受し、華嚴宗の第二祖となるのである。

支那で判釈と言うのは慧観が最初であり、彼は「華嚴」と「涅槃」の二教を重視した。この二教は仏陀説法の最高のもので、「華嚴」は仏の最初の頓説、「涅槃」は最後の訓練調熟の説法、始めて仏教に頓、漸、常住教の三種ありと説き、支那判釈説の起源でもある十地論宗の学者は、これを頓、漸、円教とし「華嚴経」は説法、形式上からは頓教であり、教義内容からは円教であると言う。この三教説が、後の華嚴宗に於け

る法蔵の五教十宗説となつた。この事は論文に記述している。法蔵に於ける華嚴教學の根本体系は、三性と因縁と十玄と六相との四部門により組織せられ、三性説は法相教學の実相論的断面として種子説に於ける縁起論的思想が重要である。真諦の摂論派と玄奘の唯識派の間に相違があり、三論教學にも影響する。法蔵の三性論は法相教學の三性説に對し法性を立場とする如来藏縁起説に於て、その互融無礙の論成により華嚴教學の内容として組織するものである。法蔵の教學は智儼を継ぎ、一宗の教理的組織として大成したのである。智儼の海印三昧の思想を觀法の上に体系づけ、妄尽還源觀である。その形式は起信論による実践的組織に對して教理的組織として、搜玄記の傳承を通じて華嚴經の思想を体系づけた。華嚴經の根本的立場は法蔵による如来性起品の十種の性起の因縁による、即ち法爾、願力、機感、為本、顚德、顚位、開発、見聞、成行、得果、である。

智儼は智正より華嚴經を聞き、教學組織の基礎となつた。しかし華嚴經の法門の伝統でなく、法門の伝統は法順（杜順）にうける一乘十玄門にあると言われる

が、こゝでの杜順も疑問点である。一乘十玄門は華嚴經の根本思想が法界縁起にある事を言い、縁起自体の本質を因果二門による、又華嚴經を觀行的立場で体系づけられた法界觀門で教理的に組織するものが一乘十玄門である。その思想は、法順の法界觀門と見られる。しかし十玄門の組織は智儼によるものである。華嚴經の立場を世親の十地經論の思想により、唯識と真如との立場の對立に於いて、法蔵の縁唯心門に於ける本影相對と説聽全摂の縁起觀上に展開し、華嚴經の立場で組織する。又法蔵の縁起論の組織は阿頼耶識縁起と如来藏縁起は共に法界縁起の中に体系づけられ、両者の綜合にある。所謂、性相融合が法蔵の教學組織の方法論的意義を有するものである。要するに、華嚴宗成立に關して、智正、智儼、法蔵以前の仏陀跋陀羅の「華嚴經」訳出により、又弟子慧觀、玄高、高の弟子玄暢等によつて、華嚴教理、思想的な背景というものが、この時から既に流れて來たものであつて、玄高は仏陀跋陀羅の直接の弟子として、最も禪に達した人であり、そこに「華嚴」と「禪」と言うものゝ密接な関連もあり、禪の初祖菩提達磨の思想を仏陀跋陀羅がうけつい

で、玄高、玄暢と言う様に教系が成立する様に思われる。十地論系の仏陀扇多によつて、「華嚴經指帰」が著われ、彼も「華嚴」の研究に専心した事も想像し得る。智正も仏陀扇多の思想をうけたと思われる。華嚴の教系を示すならば、

仏陀扇多―慧光―道憑―靈裕―静淵―智正―智儼―法藏の相承となるのではないかと思われる。以上は、教理、思想上に於ける相承であつて、華嚴宗相承としては、一般的に杜順―智儼―法藏となるが、これは、

先に述べた如く、第一祖杜順とするのが間違いで、智正―智儼―法藏とするのが順当だと思われる殆んど智正、智儼等によつて成立つていた。華嚴宗というものを、無師独悟によつて、法藏が大成したものである。開宗相承としては智正、智儼、法藏となり、第二祖智儼は禪と深い関係にあつて、「禪」と「華嚴」の密接な関係のある事は想像され、法藏によつて大成された華嚴宗に於ける、華嚴教理も確立したものであると思われる。

完